



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3357 号 2016.11.21 発行

新そば祭り 23日開催、舞川産PR 一関の就労支援施設 岩手日報 2016年11月21日
23日に初の新そば祭りを開く「お食事処やまじん」。石臼びきした地元の深入そばを提供する

一関市中里の就労継続支援A型事業所「お食事処（どころ）やまじん」は23日「深入（ふかいり）新そば祭り」を初めて開く。今年6月にオープンした同店は、石臼びきの県産そば粉を使った十割そばが看板メニューの一つ。今回は舞川地区の住民団体と連携し、同地区産を使うイベントを企画した。そば打ち体験も計画しており、生産者との交流や地産地消につながりそうだ。



やまじんは、福祉施設で働いた経験がある丹野健（たけし）管理者（51）が今春設立した一般社団法人ゆはずが事業主体。数年前から休業していた同店を借り、精神障害者ら6人を雇用して営業を始めた。

定食中心のメニューのうち、十割そば（500円）は味の良さと安さで好評。丹野さんは、新そば祭りを目指しソバの栽培にも挑戦したが、うまく実らなかった。知人の市農政課職員が「深入そば」を紹介し、初のコラボが実現する。

祭りは午前11時から午後3時まで。そば打ち体験の予約、問い合わせは同店（0191・23・2261）へ。

地域に根ざして障害福祉 東温で法人創立20年でイベント

愛媛新聞 2016年11月20日

障害福祉サービス事業を展開する社会福祉法人「馴鹿（となかひ）」（伊藤隆志理事長）の創立20周年を記念したイベントが19日、東温市西岡の就労継続支援事業所「アイセルブ」であった。施設利用者や地域住民らが手作り品の販売や楽器演奏などを通じて交流を深めた。



馴鹿は1996年に設立され、市内外から10～60代の約80人が利用している。イベントは県中予地方局の協賛事業として開いた。

会場には利用者が作った木製のコースターや動物のイラストを刺しゅうしたアームカバー、カレンダーなどが並び、来場者は手に取って好みの品を探していた。ステージでは三味線演奏やダンス発表があり、息の合った踊りなどに温かい拍手が送られた。

障害者の自立や雇用支援、共生社会描く ダンウェイ・高橋陽子社長



SANKEIBIZ 2016年11月21日

J R南武線武蔵新城駅近くの商店街に、障害者の職業訓練や雇用支援を手がけるダンウェイ（川崎市中原区）の事務所がある。月～金曜の毎朝10時の朝礼には18～64歳の障害者約30人が集まる。仕事にあたる心構えを確認しあい、全員で掃除を済ませて、パソコンの入力や手作業などに取りかかる。



分担でHP製作

同社は、知的障害者でも簡単にパソコンが操作できるアプリケーションツール「ICT治具」を開発。タイトルや文章、ホームページ（HP）上部の「ヘッダー」や下部の「フッター」など、HPの製作を複数人で分担できるようにした。

健常者でも覚えきれないパスワードや本人認証に必要なIDの代わりに、画面上の動物のアイコン（絵記号）をマウスで動かして乗り物のアイコンに乗せるだけで、ソフトが立ち上がるようにした。作業の順番を画面上に図示するとともに、必ず保存は「青」、作成は「緑」、キャンセルは「黄」、削除は「赤」という具合に、生活の中でなじみのある信号機の色になぞらえた。

高橋社長が会社を立ち上げたきっかけは、当時3歳だった長男に知的障害があることがわかったことだ。子供を支えなければとの思いが募る一方で、世間の障害者に対する無理解の現実に直面する。さらに障害者雇用や財政支援に関して調べていくうちに将来への危機感を抱く。「障害者の雇用を支援するようになれば、障害者自身も経済力や社会性が身に付き、障害者への偏見が根強いまの流れを変えられるのではないか」

2010年に勤めていた会社を辞め、前身となる社会保険労務士事務所を立ち上げた。

日々の職業訓練は1人による作業だけでなく、数人ずつで共同作業を行うものもあり、社会に出たときに人とのかかわり合いを体全体で覚えさせる。障害の程度は千差万別。就職先の人事担当者への説明資料にも工夫を施す。得意な分野、就業後もフォローが必要な分野などをデータベースに蓄積してグラフ化。理解を得やすくした。就業後も人事担当者や保護者への面談を定期的に行い周囲が障害者を見守る体制を築く。

9割が今も就労

ダンウェイを利用して就職した人の90%が今も元気に働いている。障害のある子供から大人まで、切れ目なしに教育できることで、彼らの秘めた能力を発揮できるよう、ICT治具と教材、講習などを組み合わせた特別支援教育プログラム「だんだんシリーズ」を開発。

こうした取り組みが評価され、今年9月、全国商工会議所女性会連合会の第15回「女性起業家大賞」で最優秀賞にあたる日本商工会議所会頭賞を受けた。

高橋社長は「生きる力を養うには、失敗しても立ち上がり、自分でできることを一つでも増やしていくことが大切。そのための「寄り添う支援」を続けることで、障害のあるなしにかかわらず、誰もが共に認め合い、尊重しあう共生できる社会をつくりたい」と話す。

【プロフィール】高橋陽子

たかはし・ようこ 関東学院大文卒。ミクニ、VSNでの勤務を経て、2010年にダン社会保険労務士事務所（現ダンウェイ社会保険労務士事務所）を開業、11年ダンウェイを設立し、社長に就く。42歳。神奈川県出身。

【会社概要】ダンウェイ

▽本社＝川崎市中原区新城1-12-15

▽設立＝2011年1月

▽資本金＝1500万円

▽従業員＝29人

▽事業内容＝障害者の就労支援

高次脳機能障害者 国立に施設 復職や就職を支援 一人一人の特性を生かす配慮も
／東京 毎日新聞 2016年11月21日

交通事故の後遺症などさまざまな原因で脳が損傷し、記憶力の低下などが起こる「高次脳機能障害者」の復職や就職支援に取り組む施設が国立市に開所した。高次脳機能障害に関し就労支援に特化した取り組みは珍しく、運営者は「行き場をなくしている当事者が社会復帰するきっかけの場所にしたい」と話している。【蒔田備憲】

この施設はJR国立駅近くのビルにある就労移行支援事業所「レジリエンス」。10月に開所し、11月上旬時点で7人が利用中だ。

<この人このまち>個性尊重 社会参加促す 河北新報 2016年11月21日



藤原芳子（ふじわら・よしこ）1959年秋田市生まれ。民間で働きながら、通信制の東北福祉大大学院修了。2011年「ごろりんはうす」の運営母体のNPO法人あきた福祉共生会を設立。

秋田市山王で精神障害者支援施設「ごろりんはうす」を運営する藤原芳子さん（57）は、統合失調症を抱えながら社会参加を目指す人たちの就職支援に取り組む。利用者一人一人と向き合い、個性を發揮できる仕事や生きる道を共に探している。（秋田総局・今愛理香）

◎精神障害者支援施設「ごろりんはうす」理事長 藤原芳子さん

－「ごろりんはうす」を始めたきっかけは。

「東北福祉大の学生時代、研修で訪れた能代市の精神障害者就労支援施設で、偏見により就職できない利用者が多くいる現状を知ったことです。意欲はあっても働く場がなく、『どうやって生きていくんだ』と葛藤する姿を見て、黙っていられませんでした」

－利用者はどんな活動をしていますか。

「絵画や手芸、電子書籍の漫画の制作などです。精神障害があっても、絵を描くのがうまかったり、電子書籍化に必要なパソコンの知識が豊富だったり、それぞれ特技があります。それらを生かせる仕事がないかと模索しています」

「自分で考えて作ったものが売れたら、彼らの自信になります。その経験を積み重ねることが、社会参加の第一歩となるんです」

－事業は順調でしたか。

「経営に関しては素人だったため、当初は利用者が全く集まりませんでした。知人の誘いで参加した経営者の集まりでアドバイスをもらい、積極的に周知活動をしました。今は約50人が通っています」

－今年5月には利用者が店員となるカフェも開店しました。

「初めは自分から声を出すことも難しかった彼らが、コーヒーを入れて接客できるようになりました。成長が目に見えて、うれしいです」

－精神障害者に対する周辺の理解は。

「まだまだ深まっていません。就職を希望しても、精神疾患があると分かると採用してもらえないのが現状です」

「現在の施設が手狭になり新しい物件を探した際も、『精神障害者の施設』と話す、多くの物件で断られました。ビルの一室を借りるにも、『他のテナント全てに承諾をもらってくれ』と言われ、見つかるまでに1年もかかりました」

－活動を通して思うことは。

「居場所を見つけられず、どん底まで苦しんだ彼らと共に生きることは意義があることです。私の使命だと思っています。さまざまな分野の人たちとのつながりを大事にしながら、助け合っていきたいです」

領収書偽造で補助金申請か

ytv ニュース 2016年11月21日

奈良県田原本町の子育て支援事業を巡り社会福祉法人「愛和会」の元理事長ら2人が領収書を偽造した疑いなどで逮捕された。森和俊容疑者らはおもちゃなどをおよそ47万円で業者から購入したように装った偽の領収書を作成し町に提出した疑いがもたれている。

不確実な未来を「計算」する——社会保障の背後にある見えない方程式

経済学者・加藤久和氏インタビュー

シノドス 2016年11月21日

社会保障と聞いて、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか。年金、医療、介護……いずれも今の自分には関係ないと思うかもしれませんが。しかし未来は「不確実」なものだからこそ、大学生のうちに社会保障を勉強する価値があるのだそうです。

明治大学4年生の私、白石が今までずっと気になっていた先生方にお話を聞きに行く、短期集中連載「高校生のための教養入門」特別編の第1弾。安定した学生生活から一転、卒業後に待ち構えている複雑な未来に対して、私たちはいったいどのように向き合っていけばいいのでしょうか。明治大学政治経済学部の加藤久和先生にお聞きしました。（聞き手・構成／白石圭）

何のために、お金を取られないといけないのか

——最初に、先生のご専門である社会保障論について教えてください。

いきなりですが、社会保障論と言っても定まった定義がないんですよ。たとえば経済学にはミクロ経済学とマクロ経済学というのがあって、どちらも教科書の内容は決まっているんですが、社会保障論は時代に応じて内容が変わってきます。年金や医療、介護はもちろんのこと、最近では子育て支援や少子化問題も社会保障論に含まれています。

社会保障論への接近方法は大きく分けて2つあります。法律から接近する社会保障と、経済学から接近する社会保障です。前者は社会保障法を中心に学びます。僕はもともと経済学から出発した人間なので、経済学の立場から社会保障論を研究しています。年金や医療、介護の問題を、財政や人口の問題と絡めて実証分析をやってきました。

——大学の社会保障論の授業ではどのようなことを教えているのでしょうか？

基本的には制度の紹介だけでなく、制度の裏にある理論的な背景を話すことを心がけています。たとえば政府はなぜ年金を用意しないとイケないか。学生の皆さんは、そもそも「今お金を支払ってあとでもらうことに何の意味があるのか」と考えますよね。将来自分で老後の生活を支えていくときに一番頼りになるのは、自分で貯金をすることです。だから年金なんて必要ないと思われるかもしれません。でも自分で貯金して自分の老後を支えるのは、近視眼的な人間はそう簡単にはできない。考えてみてください、学生のみなさんが老後の生活設計を想像できますか？

——難しいと思います。

できないですよ。僕も学生の頃はそんな先のことはまったく考えていませんでした。それにもし計画的にお金を貯金していったとしても、それを失うことはあります。たとえば外国で政治的な問題が発生し、それが原因で株式市場が大混乱することがあります。また、過度なインフレーションが起きてお金の価値が下がってしまうこともあります。

自分から遠く離れたところで、自分の意志とは無関係に起きた出来事が、こうして自分の人生を左右してしまうことがあるわけです。一言でいえば、将来は不確実なんですよ。だから、そんな不確実な老後の生活を守るために、お互いが助け合って年金という仕組みを維持しようというわけです。

——年金は不確実な未来を安定させるためにあるのですね。

もう一つ理由があります。それは、「モラルハザード」の回避です。「老後に貧しくなっても、きっと政府が助けてくれるだろう」という考えで、若い頃から好き放題にお金を使

勉強します。だから社会保障と経済学は密接な関係にあるんですね。

500本の方程式を一度に解く？

——分析というのは、どのようなデータを集めて、どのように計算しているのでしょうか？

マクロ経済全体のデータや財政、社会保障のデータが必要です。マクロ経済というのは、所得や人口など。財政というのは、税金がどれだけ入ってくるのか、地方と中央政府、民間と中央政府の間のお金のやり取りのデータです。そうしたデータからモデルを構築し、マクロ経済や財政などの動向を描きます。

たとえば消費税を3%上げたらどのぐらい景気に変化するのかとか、年金の支給額を70歳からにしたらどのぐらい負担が減るのかなどの分析をしています。最近では、民間シンクタンクである東京財団が、年齢別の支出をもとに、将来の社会保障財政の動向などを予測しています。さらに厚生労働省や日本国民年金機構などでは、年齢別に医療費をどのぐらい使っているかなどを調査しています。それらを見て、将来的に年金支給額と若者の年金負担がどのように変化していくのかなども計算できます。

——基本的には、税金がどのぐらい入ってきて、それをどのぐらいのスケールで分配していくのかを計算していくということでしょうか。

簡単にいえばそうです。ただ税金だけでなく社会保険料も含まれますけれどね。ここで複雑になるのですが、税金というのは本来、再分配のために使われるものです。高所得の人から取って、所得の低い人に配るということですね。その一方で年金や医療などの社会保障は、表向きには、人々がお金を支払ったことへの対価として、病気などのリスクに直面した時、給付を受け取る権利を得るという仕組みになっているんです。

先ほどもいったように、少子高齢化の影響を受け、年金などの社会保障費は年々増えています。もう若者世代だけでは負担できません。だから今は、本来再分配のために使うはずの税金を社会保障費に回しているんです。つまり、今の社会保障は保障と再分配が混ざり合っているんです。保険として使うべきお金と、再分配として所得の低い人に配るべきお金が、ごちゃごちゃになっている。それがどのぐらいごちゃごちゃになっているのかを明らかにするのも経済学の役目ですね。

——先ほど、分析のときに「モデル」を使うとおっしゃっていましたが。経済学ではよく目にする言葉ですが、簡単にいえばどういうものなのでしょうか？

基本的には、方程式や関数の束です。中学生のときに一次関数をやったと思います。たとえばお風呂の蛇口から水を出したときの、経過時間と水の量の関係を関数にしたりしましたよね。それも立派なモデルです。経過時間という変数に値を入れることで、水の量を求めることができるわけですから。それを複雑にしたものが経済モデルと考えてもらって構いません。

大学で経済学を専攻すると、1年生のときに必ずIS—LM分析というものを勉強します。所得と利率を軸にした、財市場と貨幣市場の分析ですね。多くの学生はあまり意識していませんが、これも立派な経済モデルの一つです。ちなみに私が運用していたモデルでは、マクロ経済や財政に関する関数など、およそ500本以上の計算を一度に解いたりします。

——500本の方程式を解くんですか！ かなり難しい数学を使われているように感じます。

実際には500本というのは少ないんですよ。内閣府ではもっと大規模なモデルを運用しています。数学的な操作そのものよりも、社会保障の経済学的なバックグラウンドについて理解することのほうが重要です。

たとえば厚生経済学の第一基本定理と第二基本定理というのがあります。第一基本定理は効用最大化や利潤最大化行動がパレート効率をもたらすというもの。第二基本定理は政府が再分配を行うことで任意のパレート効率をもたらすことができるというもの。パレート効率というのは、誰かの状況が悪化しない限り変化しない点のことです。言葉は難しそうですが、要するにこれは、政府は公平性を改善するために、市場で再分配を行うことの理論的背景を与えているものですね。

市場競争に任せておけばパレート効率になるのだけれど、パレート効率はつねに公平であるとは限らない。そこで、公平性を期すために、政府は分配面に介入する必要がある——そういうことを第二基本定理はしています。

ちなみにこの「パレート効率」だとか、先ほどいった「情報の非対称性」や「モラルハザード」などのお話は、じつはマイクロ経済学の分野なんです。だから社会保障論というマクロ経済学の一分野のように感じるかもしれませんが、その背景にはマイクロ経済学の理論があるんですね。

将来予測のために経済学を利用する

——社会保障はさまざまな経済学的理論によって成り立っているということですね。

それを理解することが大事だと思います。社会保障論が専門なのに何を言ってるのと思うかもしれませんが、社会保障の制度の細かな知識だけを詰め込んでも、制度は時代によって変わるので、あまり意味はありません。大事なのはむしろ制度の理論的背景や経済学的な意味ですよ。それを理解していれば、どんな時代でも自分の頭で社会を捉えることができるはずですよ。

先ほど経済学では社会保障論ではモデルを扱うといいましたが、それは将来予測にも使われます。将来、高齢者がどのぐらい増えてどのぐらいお金が必要になるのかわからなければ、政策の立てようがないですね。そのための情報として将来予測が必要で、僕はそれをやってきました。

また、政策を立てるために将来予測をするというのは、普遍的な仕事です。銀行の研究所やシンクタンクなどに限らず、会社の将来を予想し、事業を計画するということは社会人なら誰でもやっています。ですからプロセスが少し学問的なだけで、仕事の構図自体はいたって普通ですね。

哲学から始まった経済への道

——先生は大学では経済学を専攻していたんですね。なぜ経済学部を選んだのですか？

もともと哲学が好きで、ニーチェとかヘーゲルとかを読んでいました。『精神現象学』なんかは、全然意味がわからなかったのですが、意味がわからないということ自体が当時は面白かったですね。それから数学や物理学も好きでした。

それで高校で進路を決めようというときに、哲学と理系、どちらにも振り切れなかったんです。同じクラスに、たくさん哲学書を読み込んでそれを解説する天才的なすごい人がいて、彼には絶対に勝てないという実感がありました。じゃあ理系になるかと検討したのですが、数学も物理も自分の才能に限界をわかっていました。そこで哲学と数学を足して2で割ると経済学かな、と思ったんです（笑）。でもそれに近い理由で経済学を選んだ大学生は多いですよ？

——理系だけど歴史に興味のある人や、文系だけど数学が好きな人は確かに多いですね。それに経済学の祖と呼ばれるアダム・スミスも、最初に著したのは『道徳感情論』という哲学書ですからね。有名な『国富論』を書いたのはその後です。

まあ、今の経済学のメインストリームは実証的な分析ですけどね。でも大学はべつに実証分析だけをやらなければならないわけではありません。アダム・スミスの哲学はもちろんのこと、ひょっとしたらマルクスの思想について勉強することもできるかもしれない。

僕自身、経済学部に入ったものの、実際には社会思想史を勉強していました。最初はマルクス経済学をやっていたんです。今ではまったく反対の立場にありますが（笑）。『資本論』も全巻読みました。卒論はマルクスとケインズ思想の比較をテーマにしました。ですの経済というよりは、ほとんど思想の勉強をしていましたね。

他には、たとえばルソーは、『社会契約論』という本を書いて、政治に大きな思想的影響を与えましたよね。ルソーについても勉強したりもしていました。経済学を本格的に始めたのは、大学院に入ってから、と言っていいかもしれません。

——本来の経済学に近づいていったということですね。どのような心境の変化があったのでしょうか。

社会思想史はもちろん興味深かったんですが、経済学はより現実と強い結びつきがあると思ったんです。言い換えれば、経済学の実証分析はいつの時代も社会に必要とされ続けるという感覚があったんです。学部時代はもちろん普通の経済学も勉強していて、これもやってみると面白かったんですね。

大学院では、実証分析を幅広い範囲でひたすらやっていました。そのなかで、財政についての分析もやっていました。そこで社会保障論と接点をもったわけです。じつは最初から年金制度などに興味があったわけではありませんでした。今は確かに社会保障論は現実世界にかなり影響のあるエキサイティングな学問ですが、当時はそれほど関心があるわけでもなく、必要だから勉強する、という認識でした。

——最初から計量経済学や社会保障論をやるつもりはなかったんですね。

でも、やれば何でも面白いという感覚はありました。最初関心がなくてつまらなくても、やってみるとはまってしまったということはたくさんあります。若気の至りという大義名分で好きなことに手を出せるのが大学や大学院の魅力だと思うんです。

社会保障について研究者になってから勉強し始めたとき、最初は地味な学問だと思っていた。学生なら誰でもそうでしょう。年金とか介護とか、おじいちゃんおばあちゃんの話だと思いますよね。でも実際にその世界に入ってみると奥が深い。

たとえばオランダでは市場競争と政府の介入を組み合わせた管理競争という、世界的にも先進的な制度をつくっています。こうした試みは、当事者である高齢者よりも、むしろ若い人たちが考え、行動している。そうした知識を得ると、自分の知らないところに、膨大な世界が広がっているということに気づかされますよね。

——最後に高校生へのメッセージをお願いいたします。

食わず嫌いをしないでほしいです。先ほど哲学の本を読んでいたという話をしましたが、その経験が無駄になったとは、僕はまったく思いません。哲学書を読んだからこそ、社会思想史でマルクスを読み、経済学に触れ、こうして今の自分がいると思っています。

今の人はコストパフォーマンス志向で、これは社会に出て役に立つかどうかという基準で自分が接するコンテンツを選びがちですよね。そういうのはつまらないですよ。どんなものでも、本を読むのは大事です。なぜならそれは、自分の世界を広げようという態度の現れだからです。自分の世界を広げようという気持ちを持つ人は、大学でも社会でも多くの本を読んでいると思いますね。

でも、本を読むなら若いうちが良いと思います。年をとると目が疲れますから（笑）。

——身体的な理由ですね（笑）。

これは冗談ですが、真面目に答えると、大人になればなるほど、本を一冊読んだときに得られる感動や喜びが減っていくんですよね。経済学の用語でいえば、限界生産性が逡減していくんですよ。世の中のことが若いときよりもわかっているから、だいたいこういうことだね、となんとなく理解できてしまうんです。

また、本を読むタイミングは大事です。中学生のときに島崎藤村の『破戒』を読んだんです。当時は意味がわからなかった。でも、高校生になると意味がわかった。そのような遡行的に理解する楽しみも、若い時ならではですよ。

いずれにせよ、自分で可能性の幅を狭めるようなことはせず、いろいろなことに手を出してみるべきだと思います。なにせ、未来は不確実なものなのですから。

<以下省略>

